

V-⑤ 質の高い教員を養成するインターンシップ型実習 (モデル提供)

大量採用時代となり、令和2年度の香川県小学校教員採用状況は、倍率が2.6倍に低下し、合格者の内62%が大学新卒者である。大学を卒業してすぐに教壇に立つ教員の質を高めるために、本校では教育実習期間(3回生の9月)の3か月前から大学卒業まで、希望者に対して「インターンシップ型実習」を実施している。これは学級担任になった際に必要なスキルをOJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)で身に付けさせるもので、5週間の教育実習中に自然と構築される附属教員との徒弟関係を基盤にした丁寧なOJTである。附属学校側も学生をうまく育てることで、生徒指導面や学級業務面等で有効な教育人材となり、WIN-WINの関係となっている。

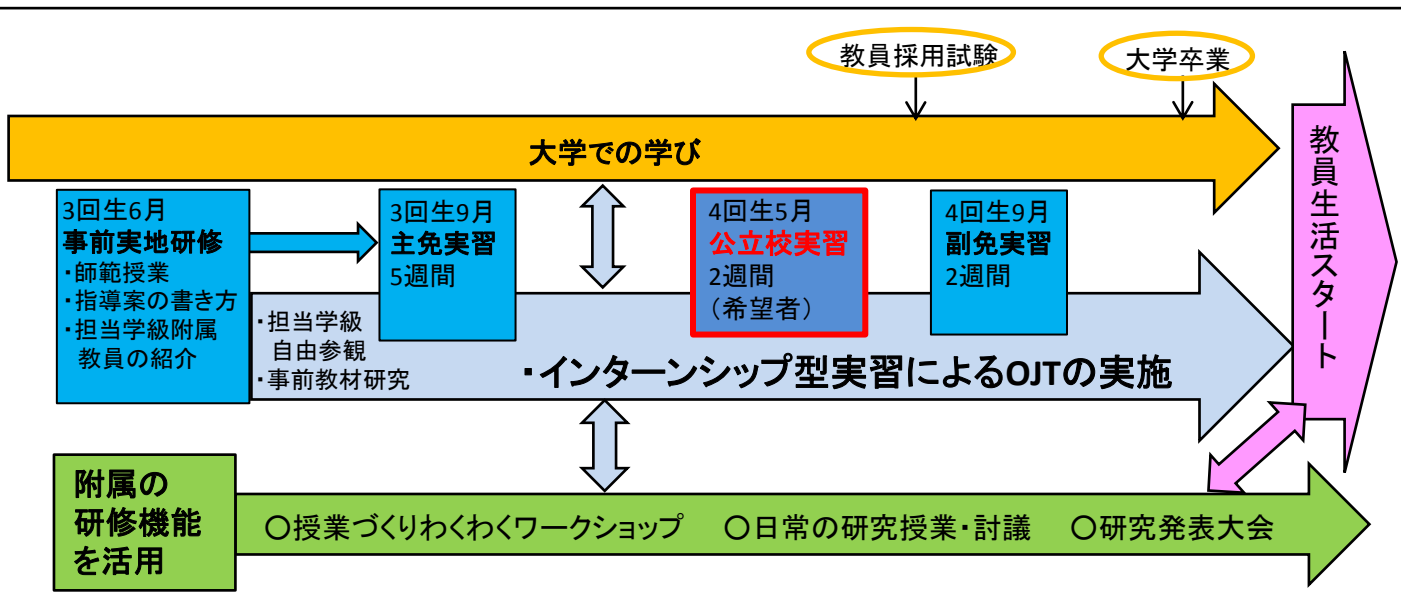
本稿では、これまでの取組と効果に加え、これからの展望を考察していく。

1 「大学での学び」「教育実習」「附属の研修機能」と連動させた「インターンシップ型実習」の概要

下図のような流れで、大学3回生の6月から、大学卒業までの期間のうち、大学での講義が無い曜日を利用して実施している。回数については、学生一人一人の希望に合わせて決めている。校外学習や研究会等の附属側が人手を必要とするときには、メールで依頼することもある(これまでの学生ボランティアと同じ)。

特に、教員採用試験後の4回生の後期は、大学での講義の無い曜日が多く、学生の意識も高い。H30年度には、附坂小へ週1回、坂出市内公立校へ週1回、県立特別支援学校へ週1回、計週3回も半年間継続して通った熱心な学生もいた。

また、下図に示す「公立校実習」とは、3回生のとき本校で主免実習を行った学生のうち希望者を対象に、本校が坂出市内の公立小学校と連携・連絡を取りながら進めている。本校と同様に、学生を有効な教育人材として考えていただける公立校の校長も増えてきている。



「インターンシップ型実習」の実施モデル

2 OJTの様子(内容は学生や教職に進んだ先輩教員の意見を参考に決定)



登下校安全指導スキルトレーニング
(JR電車の正しい乗り方モデルをロールプレイする学生)



研究授業討議スキルトレーニング



板書、発問、助言スキルトレーニング



特別支援の視点からの支援スキルトレーニング



給食指導スキルトレーニング



朝の出会いスキルトレーニング
(朝の会、帰りの会の運営も含む)



休み時間パプニング対応スキルトレーニング



校外学習スキルトレーニング
(敷ものの片付け方を丁寧に指導する学生)

写真で紹介したもの以外にも、クラブ活動指導スキルトレーニング、連絡帳・日記コメントスキルトレーニング、保護者電話対応スキルトレーニングを実施している。

附属教員との徒弟関係を基盤としているので、①附属教員のモデルを見る。②自分でやってみる。③振り返り助言をもらう。の繰り返しで効果を高めている。

令和元年度は、10月4日に教育実習が終了後、12月末までに、17名の学生が延べ54回参加している。

3 効果

(1) 令和元年度の教育実習後、インターンシップ型実習に週1回参加している学生の声より(一部)

- ・毎日の教育実習期間に比べ、準備や実習録の記入等による疲れが少ないため、実習での自分の課題についてじっくり取り組み、実習中より濃いアドバイスが附属の先生よりいただける。
- ・5週間の教育実習で関係性ができた子供たちに継続的に関われることで、5週間では見えなかった子供の成長が感じられ、教師としてのやりがいが一層強くなった。また、つまずきの対処法を具体的に見る場面が多く、担任になったとき役立つ。
- ・附属の先生方とより多くかかわれることができることは大きい。様々なことをOJTで教えていただいととも勉強になっている。
- ・何よりも楽しい。3回生9月の5週間の教育実習後、このシステムを活用しないとったいない。楽しいからこそ、卒業までの1年半、大学での授業が無い曜日に継続して参加できるのだと思う。

<インターンシップ型実習の学生が本校の研究授業・討議に参加しての声(一部)>

- ・附属の研究授業・討議に参加して、授業の奥深さ、難しさを痛感した。例えば、本時の学習課題の一つの言葉「もっと～」にしても、「もっと」とは、どのレベルを想定しているのか?」「身近な言葉で掘り下げて伝えないとイメージが湧かない子がいるのでは?」等の質問や意見である。
- ・専門教科以外の先生方からの子供の様相を基にした改善案と専門教科の先生の意見が葛藤し、討議で融合されていった。教科教育の醍醐味と難しさを感じた。大学での教科教材研究の講義と合わせて学んでいきたい。

(2) 平成30年度に本校に週1回、公立小学校に週1回、県立特別支援学校に週1回、通った先輩教員の声より

- ・公立校では、1日の流れの中で、対応することがたくさんありバタバタしてしまう。あまりにも支援が必要なことが多いので、とっさの対応力、子供とやりとりをする力、先輩の先生に相談する力を身に付けておくことが大切。附属や公立での「インターンシップ型実習」をしっかり活用すればよい。
- ・現場に教員として赴任すると、子供への指導だけではなく「大人とかかわる力」「チームに入っていく力」が求められる。附属のインターンシップ型実習で、運動会、預かり学校、屋島体験学習、研究会スタッフなどに積極的に参加し、附属の先生としっかり会話し、共に成功を喜び合えた経験は大きい。
- ・いろいろな学年でインターンシップ型実習を経験させてもらうとよい。
- ・採用後も附属の先生とつながり、アドバイスをもらったり、附属のワークショップに気軽に参加できたりするのも大きなメリットである。



先輩教員から効果を聞き取る

(3) 公立校での教育人材として

平成30年度、5月に2週間の公立小学校実習を行った者の中で、教員採用試験終了後、卒業までの半年間、同じ公立小学校で、週1回インターンシップ型実習を行った者が2名いる。

校長からは、「休み時間など子供たちに積極的にかかわっていただき、貴重なマンパワーになった。続けて新規採用教員として来てもらいたいくらいだ。」担任からは、「授業支援のみならず、休み時間や給食等、子供とかかわってくれることで子供が落ち着いてきた。」と肯定的な意見をいただいている。参加した2名の学生も公立校の役に立った喜びと自信は大きく、現在、新採教員として活躍している。

現在、香川県では教員の若年化とともに講師不足も深刻化している。このシステムを附属を基盤として公立校へも広げ、教育人材として活用するのも大きな地域貢献である。

(4) 働き方改革との相乗効果

1ページの図に示すように、教育実習の事前実地研修を教育実習が始まる3ヶ月前に行うようにした。いきなり、附属教員の師範授業を見せ、その授業をもとに学習指導案の書き方を教え、担当学級と担当教員を紹介し子供と対面させた。学生のモチベーションは格段に高まり、実習が始まるまでの3ヶ月間に全70名の学生の内、48名がのべ約110回来校し、担当学級の子供観察、教材研究等の準備を行った。そのため、附属教員は教育実習の5週間、計画的に実習指導が行え、18時には学生を退庁させることができた。附属教員も学生も毎朝さわやかに子供を迎えることができたのが、インターンシップ型実習と働き方改革の大きな効果である。

4 これからの展望

(1) 充実した研修にするために

ア 新採教員に必要なOJTになるようさらに工夫する。

新採から3年目の若年教員の意見、若年担当のベテラン教員や校長の意見を集める。教育委員会新採担当に意見を伺う。教育学部のカリキュラムとの連動を一層強める。

イ 県教育委員会と香川大学が協働して実施している学生ボランティア派遣システムとの連動を図る。

附属を基地とした、本取組がやがては、全県の公立校への「学生ボランティア」の質の向上に貢献できるようにする。

特に本稿で報告したような、マンパワーが必要な公立校への貢献事例を増やしていく。

ウ 香川大学教育学部以外の学生にも拡張する。

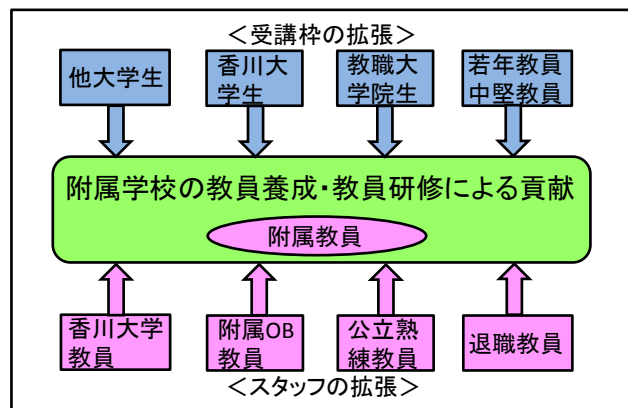
教員採用試験合格後の4回生後期は本研修の効果が大きい。他大学の合格者のうち意欲があり、希望する者は、「次年度から香川の同僚教員」と捉え、附属で香川大学の学生とともに研修させる。

(2) 学生と若年教員を教育界全体で育てる風土を広げるために(附属のプラットフォーム化)

ア 附属の研修機能「授業づくりわくわくワークショップ」などの場を工夫し、学生が採用後の仕事に見通しがもてるよう、学生と若年教員が気軽に会話ができるようにする。

イ 若年教員も悩みを語り合えるような場を工夫し、同僚性を高められる研修にする。

ウ 現在、附属教員が担当している「授業づくりわくわくワークショップ」のスタッフを附属型コミュニティ(人とのつながり)を活かし、本校OB教員や公立校教員、退職教員などに広げ、学生、若年教員を皆で育てる風土をつくる(附属の教員養成・教員研修機能のプラットフォーム化)。



附属型コミュニティ(人とのつながり)を活用したプラットフォーム化の構想

(3) 希望する学生を増やすために

ア よい事例を集め、先輩学生の声として、学生に発信する。チラシを作成する。HPで発信する。

イ 坂出高校教育創造コースの第1期生が、令和2年度より大学に進学する。附属坂出学園をフィールドとして学んだ高校時代の経験が大学でも活かされるよう、附属とのつながりを継続する。さらに、大学での学びと現場での学びの連動効果が高まるよう、大学とともに考える。

ウ 教育実習をこれまでの「時間外熱血指導型」から「計画的腹八分目指導型」に移行し、「明日も来たいなあ」と思う学生を増やす。

(令和元年12月20日現在)